

## 言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 金 慶 允  
論 文 題 目 矢内原忠雄のキリスト教思想と朝鮮  
論文指導委員 鶴飼 哲教授  
学位取得年月日 2007年7月31日

本研究では第一に、矢内原の著作のなかで、朝鮮との関連でなされた聖書解釈を中心に、その内容とその意義について考察した。矢内原の朝鮮論として通用されていた「ロマ書講義」の中で語られていた民族問題を手がかりにして、朝鮮との関係に於いての「民族」問題についての彼の構想はどういうものであったのか、また、『ロマ書講義は』実際どういう民族論だったのかを明らかにした。また、ロマ書解釈という糸口から、朝鮮の日本の内村継承者たちがどのようにして互いに共感し、差異を感じ、植民地と被植民地の地でそれぞれの思想を活かしていたのかを考察した。

現在までの矢内原の研究においては、彼の反戦・平和主義者、良き朝鮮の理解者としての側面と天皇制批判における曖昧さ、植民地政策を良いと判断したことの格差、その両面性を生み出した思想における原因を明らかに出来ないまま、夫々を高く評価したり、批判する形で惑わされたように思える。本論文においては矢内原のキリスト教思想理解、聖書理解の方法論への検討を行った。また、朝鮮で同じ無教会主義者として、そして民族主義者として植民地時代を生きた金教臣の思想を比較検討し、相違を明確にしようと努めた。

### 1. 金教臣の無教会主義思想と民族主義

金教臣の主な思想は以下の通りである。金教臣の信仰観の中心としてあったのは、神の摂理から歴史を理解しようとしたことである。つまり、神から与えられた民族の固有の使命があり、その使命をまっとうすることが彼を含む『聖書朝鮮』の同士たちの活動内容であり、目標であった。

金教臣にとって最高の愛の対象は朝鮮と聖書であったという。彼が唱えた「純粋な朝鮮産キリスト教」は「朝鮮魂」の追求であった。そして無教会主義は「朝鮮産キリスト教」をたてる方法論であった。

金教臣は無教会主義の意義として主張された、現代教会に対する宗教改革的性格のところを重要視していた。金教臣は「ガラテヤ書」の二章の二十節を引用し、無教会主義の改革性として、自我というものを十字架にかけける信仰であるといいた。金教臣が律法や儀式でなく、神の子を信ずる信仰によって生きるものであるためには、十字架の上で肉、自我の死を経験しなければならないと理解していた。

金教臣には朝鮮という自我があった。創刊の辞で明らかにしているように、「朝鮮を愛すると

大声ではいえなくとも、朝鮮と自我との間、何かがあるということは知っていた」とした。自我のために何かを行い、朝鮮のために何をはかったらよいのかを悩んだすえ決めたのが『聖書朝鮮』であった。朝鮮という 自我の現実は余りにも暗鬱であった。彼は自我を実現し、来世を待つことを信仰の力と希望としたようである。

一九二九年以後は、全世界の文化の大潮流が停止、逆転したというが、そのような暗黒時代に希望をかけるをことはできない。よしんばそれが暗黒時代でなく、自由と政権が保障される社会へと変化するとしても、彼は希望をもてないという。

宇宙の新しい秩序と表現した、個人から宇宙へと繋がる新しい世界への展望は以下の通りである。キリスト教のことばが一個人の心のなかに臨むと、そのなかで対立が起る。これが霊と肉の対立と戦いである。元来の古いものとことばによって新しくなったものの闘いのとき、新しいものが古いものを除き、霊が肉を勝つときに新しい秩序があらわれる。このような新しい秩序、即ち救いが得られるためには一人の人格の内部において激烈な闘いがおこることは必然的である。

これは物質世界においても同様であり、法則として働いている。国家や文化、道徳などは、新しい秩序からつくられなければならない。国家や民族の文化に価値がないとまでは言わないが、大体のものは汚いものがその本質をなしており、消滅するもの、肉のものがその中心勢力を占めているためである。従ってこのようなものをすべて変え新しい秩序とつくりなおさなければならない。新しい秩序が一人一人の個人のなかでつくられ、家庭と民族のなかからあらわれ、それを全宇宙に達成する目標に向かって戦う存在なのである。これは、個人と民族の救いを完成させていくプロセスにおいて、「神の国」の実現が可能であるとみた矢内原と共通する。

無教会主義の信仰の来世観は、現実の政界での積極的義の実践を通じて新しい秩序へと繋がると考える。彼らの論理では個人の信仰と普遍の歴史的使命を果たす具体的対象と道具は他ではない、自我と民族、ないしは民衆となる。

植民地朝鮮を生きた金教臣等の無教会主義者たちに克服すべき自我は自分と朝鮮であった。この二つの自我はイエスを信じるといふ信仰にすぎり、再臨のために実践することを通してその内部において、個人と普遍の出会いを試みたのである。そしてこれが無教会主義が志向したことであった。待ち望む新しい秩序のために自我を成就させること、その自我を通して民族の歴史を生き、民族の歴史をつくっていくことが、金教臣が理解した無教会主義の使命であった。

## 2. 矢内原忠雄の「ロマ書」 理解とキリスト教の日本化問題

矢内原はパウロの『ロマ書』を「民族哲学」として理解していた。「パウロが論じた民族哲学の実践的・道徳的意味」、「パウロが論ずる『選の問題』の主題は民族の救」などの表現からもそれを確認できる。

矢内原忠雄はロマ書のなかで、救いにおける「民族」の力学は、甲民族が神に対して不順なる態度を取ることによって、乙民族が救われ、乙民族が神から憐れみを受けることが甲民族を励まし、それに憐れみが及ぶきっかけとして作用することである。

神は、「凡ての民族を神の憐憫に浴せしめんが為めに凡ての民族を不順の中に取り籠め給うた」

のであり、これが世界万国民の救いの経緯なのである。

そして、弁証法的な運動としての、イスラエルの不順と異邦人の救いの関係としての「一貫した歴史的運動」の中、全人類の救いと神の経緯の目的が完成されるのである。

それを今日に適用すると、「英米民族の不順によつて救が日本民族に來り、日本民族の救がまた英米民族の真の救の契機」となり、「中華民族と日本民族との間にも、同様な救の關聯が考へられる」ことになる。

問題は、ここである。パウロが説いている選民から異邦人へと、広がった神の恵みによる救いの原理における神の恵みに焦点をおかず、「民族」に重点をおいたことによって、虐げられる民族を説明しようとした。

矢内原はユダヤの歴史を朝鮮に適用し、日本による植民地支配の必然性を説明しようとした。このような思想は、日本的基督教の確立という方向へと進むことになる。

日本における基督教の「日本化」問題は、特に一九三〇年代に見られる論理はその志向するものがあまりにも国家主義的な性格を持っていた。そして、それらの国家主義とは區別される「無教会主義者」である、内村鑑三や矢内原忠雄のなかにあつた「日本的基督教」も、実は「愛国」や「民族主義」問題から自由ではなかつた。

矢内原がこだわつた「日本的」とは、内村から始まつた旧約と新約における歴史理解から必然的に起る当然の思想的帰着である。

矢内原は内村の旧約の日本と新約の日本の考え方を継承して日本の基督教の展望を描いていた。彼がユダ民族と日本民族を同一視して解釈する限り、矢内原が日本の伝統に執着、固守することは必然不可欠なことなのである。

彼の思想からは旧約は日本の伝統であり、新約は日本の福音であつたために、そのなかのどの一つも欠かせるものではなかつたのである。

矢内原のイメージした「神の国」は、国粹主義的国家主義とは異なるが、日本の伝統と切り離して考えられたものではなかつた。そして事実、その伝統への追求は、より良い伝統の日本という志向と共に、一層美しいものを見つけ出そうとする過去への回帰を同伴し、閉鎖性を露呈する可能性を残していたのである。

矢内原は基督教信仰の役割と「国体の完成」とはどうつながり 日本民族の神話はどのような意義があるというのか。矢内原によると、神話とは、未だ文字のない時代における国民生活上の事実を基礎とした理想の表現であり、その国民の理想によつて解釈し言い伝えるものである。そして「理想」とは永遠的であることを要求するが、天皇が万世一系であることは歴史の継続性の示しだと説明した。

彼は「天孫降臨の神勅に匹敵する同じ様な性質の神話を、私共は創世記に見るのであります」と天孫降臨の神勅と創世記のアブラハムの話の同一視する。

そして、「アブラハムに対してエホバ神が与へ給うた約束と天孫に対して天照大御神が与へた約束とは、世界歴史に於いて相匹敵する二大事件である。こんな永続性の理想を抱いて生きて來た民族は珍しい」と誇る。このような自負は「イスラエルは神の選民であるといふと同じ意味に

於いて、日本民族も神の選民」であったことと繋がる。

このような論理を持って、矢内原のキリスト教信仰は日本の理想の実現、「国体を完成」することへと向うのである。

### 3. 矢内原忠雄の植民地政策論の評価と民族論

矢内原忠雄は朝鮮統治における同化主義的な側面を批判し、朝鮮議会の設置の必要を主張した。朝鮮議会設置論は、大正デモクラシーの代表的存在として理解されてきた。である。矢内原の主張に即して、体制外からの批判の論理として理解されてきた。

矢内原忠雄の自治植民地論の特徴は、植民地議会の設立、責任内閣制の樹立の二つである。しかし、朝鮮に関して、責任内閣制が主張されなかったのは、朝鮮総督府の独断的専制支配の原因を日本帝国主義の同化主義政策によるものであることは批判できても、その根本にある天皇制への問題まで追究できなかった限界にある。日本の天皇制が植民地朝鮮の統治にあたり、絶対主義的性格を放棄して責任内閣性をとると到底考えられなかったのである。矢内原忠雄は議会主義を擁護し、「臣民の代表者たる帝国議会の翼賛の道を広めつつ統治し給ふ事が、即ち、我国体の伝統である」と新しい伝統を道を開くことを主張したが、天皇制は、変わらぬ価値、保有すべき伝統として天皇制を擁護した。

矢内原が描いた真の進歩的なる民族主義とは、民族精神と世界文化の弁証法的結合、「その民族が歴史上多年蓄積して来た処の民族文化民族精神の光輝を発揚して、以て世界文化の内容に新たななる貢献を加へ、進歩の原動力を提供する」ことであった。

このような思想から、「教育は原住民の文明を高むるが、文明の伝達必ずしも被教育者の心を得ない。之に反して宗教的信念の伝達は真に内心に於ける融和をきたらす」と教育に於いて本国の言語を強要するより、宗教により感化がより効果的であるとし、朝鮮人のための宗教活動・伝道がないことを批判している。つまり、植民地での教化の必要性を主張し、植民地支配による文明化・あるいは文明的発達を構想していたのである。

### 4. 小結 -矢内原忠雄の無教会主義思想と民族主義

内村鑑三は、キリスト教歴史の発展がローマ・カトリック教会よりプロテスタント教会へ、そしてプロテスタント教会の論理的帰結が無教会主義へと展開したと思っていた。したがって今日の教会は第二の宗教改革を必要としており、それが日本において起りうると無教会主義の意義を唱えた。

矢内原は内村鑑三の思想を継承しており、無教会主義を宗教改革として理解していた。宗教改革としての無教会主義は日本的キリスト教という発想と繋がるのである。内村鑑三は西洋のキリスト教が腐敗していて、真の福音から逸脱していると考えた。そしてその影響が外国宣教師を通し、日本の教会に入っていると判断したのである。そして、彼はそのような西洋のキリスト教のその教派主義的な信仰を批判し、教会組織、礼拝、さらに、宣教師の派遣、

物質的援助を拒絶し、自由で、純粋な日本のキリスト教をつくると考えたのである。無教会主義はその具体的実行であった。

矢内原は、内村鑑三の無教会主義が、近代精神の行き詰まりを打破し、人類の文明を一步前進せしめてゆく精神であり、日本国民も全世界も救う力であるという。

矢内原において無教会主義とは、前述したように、宗教的レベルでの改革の問題として止まるものではなく、近代精神の精髓として人類の文明の進歩に寄与する一つの代案であった。

しかし、矢内原は神の国の単位は個人に帰着するといいいながら、民族的なものがあることを捨てることができなかった。そして、無教会主義が持った、民族的な側面が世界的な側面と矛盾しないことを解明しなければならなかった。

植民地時代、朝鮮と日本において思想的にはその志向を共にしながら、民族の場でその精神性を普遍的なものとして考えた人々が無教会主義であったと言える。

彼らはキリスト教の神の愛と救いという思想のなかから民族の普遍性と救いの模索を試みた人々であろう。

植民地支配の現実が苦しければ苦しいほど、民族魂の普遍性を渴望し、植民地支配が悪いと認識していた知識人の立場からはそれをまた普遍性という武器をもって解決しようとした。しかし、現在から見るとそれは結局民族主義という新たな枠、近代的主体を形成しようとしたものがきに見えてしまう。聖書的史観、聖書から歴史と社会を解釈することは、特殊性の問題を普遍性に昇格させた過ちであると考えざるを得ない。そしてそれは彼らの意図が不純ではなくても、現在の頑固なナショナリズムを構築する素材として使われていることは否めない。

鶴飼哲氏は、デリダが移民への選挙権の付与を要求し、国籍と区別された新市民権の制定を唱えていると紹介し、新市民権に時間と場を与えるような「魂」と「精神」の間隔化」を提示された。

私の問題意識もまた、無教会主義者たちの民族魂を定立し深めようとしたことの歴史的意味を認めつつ、「精神の間隔化」の模索の一つとして彼らの民族主義の分析を試みた。他者を排除した主体形成の欲望は完全になくなることは不可能であろうが、最小限のものとする方法は、金教臣らが努めた自我を十字架につけられることかもしれないと思うのである。